



○工学部創立七十五周年誌と記念出版の刊行

工学部は、一九七〇年に五十周年を挙行したので、その後の二十五年の工学部の軌跡と現状および将来への展望、ならびに七十五周年記念事業の概要を、論文コンテストも含めて記載し、七月末に刊行することにした。

さらに、工学に関わる各種事象や現象の不思議さ、面白さを中高生ならびに一般の人たちに知ってもらうとともに、工学部の活動内容を紹介する意味で、一話二頁での「技術最前線八十二話―二十一世紀の技術社会を拓く―」と称する書籍を七月末に発行し配布することを企画し、作業に取りかかった。

○留学奨学生制度の発足

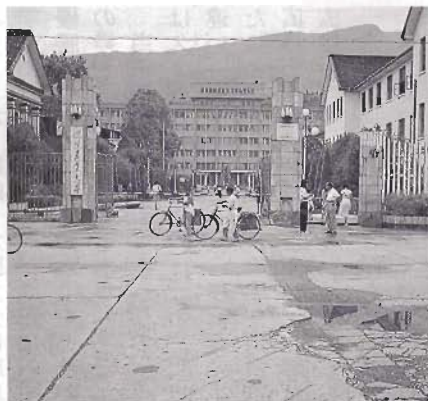
国際協調と国際貢献をさらに深め、工学部のイメージアップのため、創立七十五周年を契機として、毎年一名の大学院生を六か月から一年以内で海外に派遣するとともに、海外から同様に一名の留学生を受け入れる「留学奨学生制度」を発足させ、本年度から実施することを発表した。

生物生産学部、

四川農業大学と学部間

交流協定の締結

生物生産学部畜産科学講座 ◆ 山本禎紀



▲四川農業大学

はじめに

国際交流協定の多くは、特定の教官や研究室間の付き合いとその実績を基礎にして結ばれています。しかし、ここにご紹介する四川農業大学との場合は、だいぶ違った経緯でなされました。

広島市のローカル番組では、しばしば四川省との交流のニュースが取り上げられ、中国の中でも四川が身近に感じられます。これは、広島県が四川省と、広島市が重慶市と、ここ東広島市は徳陽市と、四川農業大学のある雅安市が三次市というようにさまざまレベル

で縁組がなされているからです。

七塚原にある県の畜産試験場を訪ねると四川省からの研修生に、養豚家を訪ねると四川の農家からの実習生に出会うなど、交流の盛り上がりを感じられます。そこで当学部でも、四川省の大学と学術交流をはじめ、地域の人々や家族を含めた本格的な国際交流に発展させたいと思いついたのです。

しかし、残念ながら四川と特別のつながりを築いている教官はいませんでした。

交流協定への道程

交流の第一歩は、一九八八年名古屋で行われた万国国家禽学会に、四川農業大学の邱祥聘という教授が招かれていることを知り、連絡を取ったり、面識のない先生を空港で迎えるなどから始めました。

当時、通訳のできる院生がいなかったため、工学部の院生、張小春氏に頼み、先生の講演と交流の会を成功させました。

その後、一九九一年に私が四川農業

大学を訪ね、講演と交流懇談会を行い、お互いに援助しあい交流を重ね、協定を結ぶ努力をすとした教授間の「交流覚え書」を交換しました。一九九二年には国費留学生として周維統君を迎え、一九九三年には訪中した山谷洋二教授が専門家として交流を深めてきました。また、この交流に積極的に取り組んできた畜産系では、当学部の実情を理解してもらうために資金を工面し、張光柱助教授と毛凱講師を招いて、交流の可能性を検討してもらいました。

個人的な交流には必ずしも交流協定を必要としませんが、資金援助の申請や学生を交えた場合、正式な協定が必要になります。四川農業大学側は協定の締結に積極的でしたので簡単に結べるものと考えていましたが、当時、学部長は極めて慎重で、留学生が帰国してからと条件をつけられました。

学部長が代わり積極的になっていただけだったので、早速本年三月に学術交流協定を締結していただきました。岡田育穂学部長と胡祖禹校長との協定書への調印は、実質を重んじお金をかけない郵送方式ですませていただきました。

四川農業大学と今後の交流について

四川農業大学は九十年に及ぶ歴史を持ち、キャンパスは四川省の省都「成都」から西南へ一五〇キロほど離れたところにある雅安市の中心部にあります。学部学生は約二二〇〇名、大学院生は博士課程二十五名を含めて約一五〇〇名、教職員数は、教授と助教授約二〇〇名、